

今後の防除および仕上げ摘果等について

福光フルーツ生産者協会
富山県砺波農林振興センター

1 概況

ふじの開花始期は4月19日（前年より2日遅い、平年より1日遅い）、開花盛期は4月21日（前年より1日遅い、平年より1日早い）となりました。予備摘果を早急に終わらせるとともに、仕上げ摘果は6月20日頃（満開60日後頃）の終了を目安に作業を進めてください。

現在、一部でアブラムシ類による被害葉が散見されていますが、目立った病害虫は見られません。また、樹勢の弱い樹においては、早期に摘果を行うことや通常より着果量を減らすことで、樹体への負担を軽減するように努めましょう。

2 防除について（ふじ基準）

引き続き褐斑病の重点防除時期です。下表を参考にして、定期防除に努めてください。また、褐斑病の感染源となる胞子は降雨によって飛散・感染しますので、雨前散布を基本とし、散布間隔が10日以上開かないよう心がけてください。

ハダニ類は発生初期が重点防除時期です。高温・乾燥が続くと多発しやすくなるので、注意してください。

薬剤は、散布ムラの無いよう、ていねいに十分量を散布（※）してください。

※：農薬散布時は周囲の他作物や住宅等への飛散防止に努めてください。特に通学路に面した園地では、登下校時の時間帯等、十分注意してください。

散布時期	対象病害虫	散布薬剤	使用倍率	100%当たり薬量
6月7日頃	輪紋病、褐斑病、斑点落葉病	ナリアWDG	2,000倍	50g
	カメムシ類、シンクイムシ類、ハマキムシ類	サイアノックス水和剤	1,000倍	100g
6月17日頃	輪紋病、斑点落葉病	オキシラン水和剤	500倍	200g
	褐斑病	トップジンM水和剤	1,500倍	66g
	アブラムシ類、カメムシ類、モモシンクイガ、	キラップフロアブル	2,000倍	50ml
6月27日頃	輪紋病、褐斑病、炭そ病、斑点落葉病	パスポート顆粒水和剤	1,000倍	100g
	カメムシ類、シンクイムシ類、ケムシ類	ダントツ水溶剤	4,000倍	25g

※ 展着剤を加用すること（マイリノーの場合 10,000倍（10ml/100リットル））。

3 仕上げ摘果について

仕上げ摘果は、ふじの場合4～5頂芽に1果（1果あたりの葉数が60枚程度）の割合で、果実が大きくて形が良く、果梗（果実の軸）が太くて長いもの残してください。ただし、樹勢が弱い樹や下垂枝は着果量を少なめに、樹勢が強い樹や立ち枝は着果量を多めに調整しましょう。

<摘果する果実>

- ①奇形果、小玉果、傷果、軸が短い果実、病虫害被害果等
- ②青実果（ひかり玉）になりやすい果実（果台長が2cm以上、果台枝が20cm以上のもの、長果枝の先端）
- ③日焼け果になりやすい果実（日当たりが良く、直射日光が当たってすでに赤くなっている果実）

4 新梢管理について

新梢の発生が多いと、樹冠内の光環境や薬剤の到達性が悪くなり、ハダニ類や褐斑病が発生しやすくなります。

<新梢管理の方法>

- ①主幹から直接発生した新梢、地生えは、基本的にすべて切除する。ただし、最上位主枝が主幹より細いか同等の太さの場合は、主幹上部に発育の良い新梢を1～2本残す。
- ②主枝・亜主枝の基部から1m程度の範囲では、比較的発育の良い自立した新梢を20～30cm間隔で数本残し（主枝・亜主枝の日焼け防止）、それ以外はすべて切除する。なお、残す新梢は向きをそろえると光や薬剤の通りが良くなる（写真）。
- ③果実の肥大不良や青実果の発生を助長するので、主枝・亜主枝の中央～先端部分や側枝上の新梢は切除しない。
- ④新梢が繁茂し樹冠内部への薬剤の付着を邪魔している側枝は、新梢の切除ではなく枝つりや支柱入れを行う。

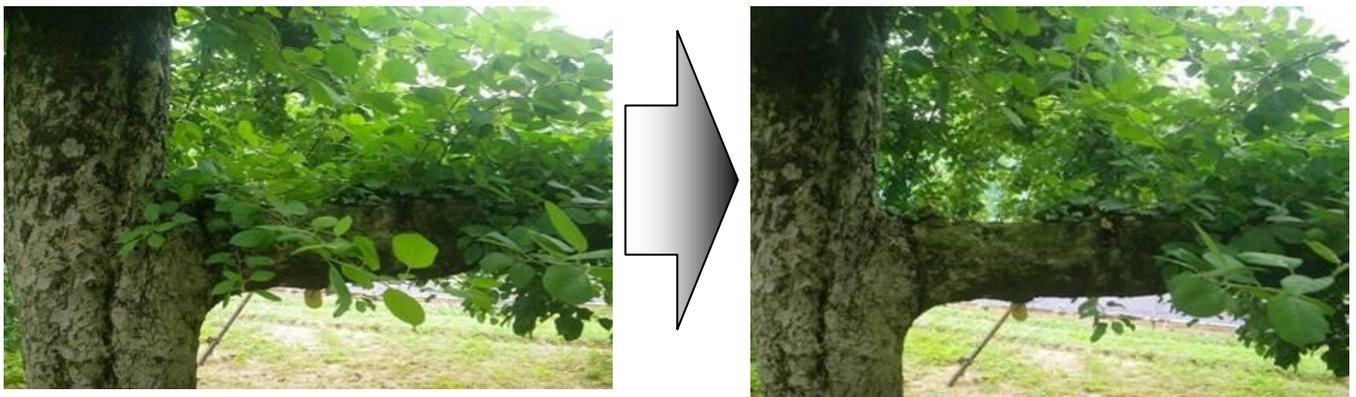


写真 新梢管理の実施例（左：実施前、右：実施後）

農作業に当たっては、こまめに水分を補給するなど、熱中症に留意してください。

問い合わせ先：
富山県砺波農林振興センター
園芸振興班 徳満 TEL32-8112